特急まつかぜ

男という生物は時として女性の前では見栄を張りすぎて失敗をする。そして又、学習効果が全く機能しないで何度も同じ過ちを繰り返すバカな種族である。私も例外ではない。

大学二年の春休みだったか、山陰地方を旅したことがある。ご多分にもれず周遊券と各地の学生寮にお世話になりながらの貧乏旅行であった。しかし唯一ともいえる贅沢をして出雲市から下関までは特急列車のお世話になった。「まつかぜ」という愛称が気に入って是非とも乗りたくて予約までした特急列車であった。

その日の出雲市駅は春もまだ浅かったせいか、どんよりと曇って、うすら寒かった。一部に降雪があり山陰線のダイヤが乱れ、「まつかぜ」は三十分も遅れるとのアナウンスをホームで聞かされ、こんなことは待合室にいる間に言ってくれたらいいものをと私は腹を立てていた。しかし次の瞬間そんなことはどうでも良くなった。私の目の前を一人の娘さんが横切って行ったのである。草色というかオリーブ色というのか、きれいな緑の当時流行のパンタロン姿なのだ。とにかくベッピンさんなのだ。

腹を立てたのも一瞬の間に忘れ、たちまち気分が華やいで自然と体が温かくなるの

が感じられたが、もっと熱くなることが車内で起ころうとは、この時点では予想をだにしていなかった。

三十分も遅れた列車にやっと乗り込み座席の周りに大きなリュックとテントをどうしたものかと思案していた私の側に先程の娘さんがニコニコしながらたっているではないか。一度に体中の血が頭に上ってしまった。彼女と私は、たまたま同じシートで隣り合わせだったのだ。

ここで男性としての見栄っ張りが一気に噴出してしまう結果になる。

最初は恥かしそうに話しかけ、そのうちすっかり話が弾んでしまった私は、身の程もわきまえず彼女を食堂車へ誘う事になる。特急列車の食堂車はこの時が生まれて初めてであった。

ハムサラダとビールが私の分で、サンドイッチとコーヒーは彼女の注文だったが本当に楽しいひとときを過ごせた。しかし幸せは長続きしないもの。私のサイフにはたったの五十円しか残らない事が分かるまでには三十分も掛からなかった。

下関駅に着いたのはもう夜だった。彼女は九州まで行くとかでそのまま別れた。楽しかったと言ってくれた。男のプライドも保てたし、満足のいく別れである。その夜は下関駅のベンチで寝る事になるが、駅の入り口に屋台のうどん屋がいて、おつゆの

美味しそうな匂いが腹にこたえた。
十一時ごろにはもう一人の学生がやって来て、並んでベンチで寝た。自転車で旅行中の彼は風邪をひいていて咳がひどかったが、やはり薬を買う金がないとの事だった。似た者同士が仲良く一夜を明かした。
翌日、飲まず喰わずで山口県下を観光し、山口大学の学生寮でやっと食事にありついた私は恥を忍んで寮長に事情を打ち明け、二千円を拝借してやっと帰路の食費を確保した。
二〜三週間して娘さんからは手紙が届いた。旅行の良い思い出になったらしく、嬉しかったと書いてあった。
情けない思いもしたが何故か男が守れた感じがして満足だった。次からはこんなヘマはしないと決心したにも拘わらず今もって同じような出来事が絶えないのは、あの時の満足感が非常に大きく影響しているのだろう。娘さんは鳥取の人だった。今もセンスのいい服を着ているに違いない。